



LingvoオクトM+

Vol.35

詩

川柳

小説・エッセイ

他



下記のQR コードでメールアドレスをダウンロードして電子版を送れと明記の上通信ください。PDFをお送りします。



Vol. 3 5

10月13日（月）イーグレ姫路

4 階セミナーC

読書会講師：

吉田ふみゑ

次回

12月8日（月曜日）

会場：イーグレ姫路予定

読書会：講師未定

講師募集

LingvoオクトM+の

参加は自由です。斬新な作品を募集します。

管理人高谷和幸

〒676-0815 高砂市阿弥陀1-11-24

e-mail takatani_kk@yahoo.co.jp

風の音にまぎれて、誰かの声がふと蘇る。11月は静かに息をする。コートのもみ、街の匂い、すれ違う気配。11月、身体は都市を記憶する。ひとつの言葉が、誰かの沈黙をほどいていく。Lingvoの11月是对話は始まりのかたちです。

ご投稿をお待ちしています。

息子

吉田ふみゑ

あの時

男性は五十四歳だった
母を亡くして四十九日が過ぎていたが
お悔やみを伝えると涙目になった

男の子だなー

女の子と違う

と思った

男の子はやさしいよ

男の子を持つ母親はみな口を揃えて言う
その後で本当のことは分かっているけど
娘はわかってからその分きついのだね

それはないだろう

と思いつつ本当だと思う

幼児のころ

小学生のころ

このまま大きくならなければいいのに
息子を見ていて思ったものだ

お母さん大丈夫？

五十を過ぎた息子が気遣かう

ありがとう大丈夫よ

と答えるけれど

なぜか瞬間

息子が三歳児に見えてしまう

アンゼルムの部屋

高谷和幸

ある美術館に木製のベンチがあった。座る人に覆いかぶさるように背中をこすりつけてくる不思議なベンチだった。

このトンネルのような、細長い部屋に7人の友人がいたはずである。そのうち2人は亡くなり、3人がグループから離れていった。記憶の中では白い靄がかかっている、すぐにでも忘れてしまいそうになっている。

このベンチ、覚えてる？

今朝、2本足のベンチになった夢を見たよ。

月がまだ低くて、大地が銀色に染まっていたね。

誰かがここに座っていた。

しまい忘れたような。

鳥打帽を目深にかぶった老人が座っていた。

あの人は手に小さなノートを持っていて、鉛筆の先が、まるで土の記憶をなぞるように、土の奥底の温かい蠢きを指先で探っていたように見えた。

太陽が昇る前、彼は「沈黙は言葉よりも重いから、すべての人間は土中に埋もれるべきだ。」とつぶやくのを聞いた。

その言葉、今もこの空間のどこかにその音が残っている気がする。

ダイブすると、「言葉」はことだからね。

ことは「もの」と同じで別次元だから、つまり触れることができない、

未生の「ひびき」であり、

「見るだけですよ」というわけ。

入れ替わって、7人のうちの白い服の女性がベンチに座る。

髪の後ろの乱れを気にしながら彼女は空を見上げていた。「私はここで誰かを待っていた気がする」

待っていたのは記憶か、それともまだ来ぬ未来なのか。

このベンチは、記憶の痕跡なんだね。

「見るだけではだめですよ。」

どこからか

鉄の修道女の声――その響きだけで、ベンチの固有の物語が変わりますね。

「ナギモカ」の空間に現れる彼女は、記憶の守護者であり、沈黙の語り手と思える。

では、オープンダイアログ風に。

あのベンチに、誰かがまた座っている。白い服の女性ではない。もつと重い、静かな気配。

心の闇がじわりと締め付ける

鉄の修道女だよ。

彼女は、記憶の錆びついた扉を開けるために来た。・・・

その足音は、まるで鉛の祈りのように、コツコツと大地に響いている。

気が付くと、ここは別の記憶の、

ただ広いだけの殺風景な部屋にいた。

床に壊れたブロックが転がっている。

寝起きした痕跡の残るベットが壁の向こうへと続いていた。

彼女は何を待っているの？

それとも、何かを終わらせに来たの？

彼女は言ったよ——「私は、忘れられた者たちのためにここにいる。」

このベンチは、彼らの声を受け止める場所。——その声は、風に溶けていくのに、彼女はそれを編

み直す。

鉄の指で、
記憶の糸。

月が彼女の肩にさらさらと触れたとき、
太陽は一瞬だけ沈黙する。

この空間が、語りの始まりになると知っていた
から。

次に進めるとしたら

語られる「忘れられた者たち」の記憶

ベンチに座った過去の人物が集まる

友人は7人。

ベンチに思い思いのスタイルで腰かけて
こちらを向いて笑っている

とげが刺さったような存在

気になるのは白いドレスの女性

自分の所作に少しも自信が持てないように

顔をこちらに向けて笑っている

神の信仰には「心の闇」がないとだめだよ

鉄のベットはぬけ殻で

こう言っているのかしら

中世の革命の女のように

修道女自身の過去――なぜ鉄でできているの

か、
何を背負っているのか
語れないのは
それは、祈りが重すぎたからかもしれません
あるいは、語られなかった記憶を抱えすぎたか
ら。

鉄の修道女の変容

昔、彼女は布の衣をまとっていた。

風に揺れる、柔らかな修道服。

でもある日、語られぬ声を拾いすぎて、身体が沈
黙の重さに耐えられなくなった。

それで、鉄に？

ええ。言葉にならない悲しみが、彼女の皮膚を冷

たい鉾物に変えた。・・・

それは防御でもあり、

記憶の器でもある。

ここで私は大事なことに気が付く

この集合した友人の中に

私はいないのだ

痛みは感じない、

でも、

記憶は感じる。

錆びついた友人たちが立ち尽くしているのだ。

はりまの国にさるがくいたるゆえん

せんだそうすけ（じつははたのかわかつ）

さて翁の面をば祐筆（千田）に付けさせ、われ秦河勝の魂のりうつさせて、猿樂の播磨に伝わりたるいきさつを述べ申そう。すなわちウルトラマンことハヤタ、ウルトラセブンことモロボシ・ダンの同類と解するがよろし。そもそもわれ河勝はかの耶蘇キリストが生誕せし清しあの夜、東方の三博士のひとりバルタザールとしてペツレヘムにおもむき、かの赤児を寿ぎたるのち、隊商となりて東方へ帰りゆきたり。絲綢之シルク路ロードの途中で齡尽きかけたるも、転生復活の秘儀、不老長生の秘術もて、天の磐舟たるカプセルに乗りて、どんぶらこどんぶらこ東夷のこの島にいたれり。そのさまを目撃したる、おまえ百までわしや九十九までという松林の老翁老婆、腰をぬかしつつも、われを養子といたし、柴刈と洗濯の労働をわれに与えたり。養父養母に孝養をつくして極楽往生を見届けたるのち、猿・犬・雉を仲間とする四天王として近隣の悪鬼どもをことごとく討ちたいらげ、余勢をかって聖徳太子こと厩戸皇子のいくさに加勢したり。あれ、おかしいな。わし耶蘇のシンパなのに、いつのまにやら釈迦の門徒になっちまった。きけば厩戸皇子、うまやで生まれたというから、ベツレヘムの赤児とおんなじだ。さては生まれ変わるか？ 妙ないきさつで皇子に仕えることとなり、河内に四天王寺、播磨に鶴林寺、山背に広隆寺、大和に斑鳩寺を建てさせられる羽目になりたり。皇子はまたわれに仰せあり、おまえは諸国遊覧見聞あまたありたるゆえ、やまとの国の民びとの生活たつき、安からんがため、遊芸をひろめよ。人はパンのみにて生くるにあらず、サーカスも要るんだよね。ホモ・ルーデンスだからな。ゆえに六十六番の遊宴をなして、これをば《申樂》と号せし由。

小説『パンドラの匣』に残りしものを（上）

瀬川健 郎

姫路城が、昭和の大修理をしていたころ。

五層の大手守と三つの小天守は、巨大な黒い素屋根で覆われていた。魔神を思わせるような暗鬱さを見る人々に与えていた。お城の三の丸広場の西にあった図書館は、開館している。旧制鷺城^{ろくろ}中学の校舎跡を使用していた。木造の二階建てで、歩けばコツコツと音が響く。

中学三年の夏休み、喬^{たかし}は何の気なしに行ってみた。広い自習室がある。六人掛けの大きな机が十ばかり並んでいる。市内の中・高校生が静かに勉強している。今のようにクーラーはない。開け放った窓から、時折、涼しい風が吹いてくるのが感じられた。その一角に座って宿題をしていた。

そのとき、一人の女子中学生が颯爽と現れ、喬と同じ中学の男の子に話しかけてきた。華やかな笑顔、顔立ち。すらりとしたスタイルから発せられる明るい声とリズム良い話しぶりが、古めかしい辺りの空気を一掃する。息を呑んだ。その男の子も、何か射すくめられたように生返事をして元の姿勢に戻った。たぶん小学生のとき、同じ塾に行っていたのだらう。彼女は座るところを探した。喬の前の席しか空いていない。幸運にも、そこに座った。

その人が私立中学生であることは、真っ白なブラウスの上に着た紺色のベストと赤いリボンから、すぐ分かる。頭の真中で分けた髪を三つ編みにし、肩まで垂れて輝くように見えた。微かに洗いたての髪の毛の匂いがした。

記憶を辿ってみるが、なにせ六十年以上前のこと。断片的にしかり思い出せない。

誰かと話しているときに、自分の名前をいったー中田朋子。

「とも子の、ともは、友だちの友ではなく、月ふたつの朋よ」念を押した。なぜか、へこれだけは、覚えておこうと思つた。二カ月後に、その名前を書くとは、知るよしもない。朋子さんは、教科書や参考書、ノートを広げ、真向かいで勉強している。ジツと見つめていたかったが、悟られてはいけなと、自分も学習するふりをしていた。一時間ばかり経つて、一休みするうちにカバンから本を出してきた。小さな文庫本。その本を凝視する。病弱だった喬は、十才のときから文豪たちの小説を、二百冊あまり読んでいる。表紙の模様は岩波文庫、題名は「初恋」。その下に記してある作者名は、遠くて判読できないが、カタカナだった。へ外国の人だな」

たぶん読みかけだったのだろう。頁の途中から熱心に読み始めた。その本がロシアの作家ツルゲーネフ『初恋』であることを知るの、ずっと後だった。小説の主人公ヴラジミールが恋人ジナイダを見るように、読書姿を眼に焼きつけた。

姫路城の解体工事は約七年もの年月をかけて、よう

やく素屋根の上部がはずされ、最上階の屋根が現れた。でも、白亜の大手守が全貌を現すのは、まだかなりの時間がかかる。市民の期待を象徴する銀色に光る瓦のお城を背景に、自転車のペダルをこいで、喬の前を通り抜けた。すらりと伸びた足の爪先で軽やかにこぎながら……。

※

それからというものの、朋子さんのいろんな姿影が錯綜し、胸の中に棲みついたままだった。二カ月余り、寝ても覚めても頭から離れない。いつしか疲れを通りこして、茫漠となるときもある。まるで白鷺が沼の叢から飛翔するように、その姿もまた離れ去ってしまう。うとうとと寝入りながらも、ヒシツとばかり取りすがった。

もう自分でも限界がきているなと思つたとき、判断を失った。もはや電話をするのに躊躇いはない。名前をいって、交際を頼んだ。電話口で、なにやら誰かと話す様子が伺えた。

「学校が男女交際を禁止していますので……」

まぎれもない朋子さんの声。やや沈んだように聞こえた。

「そうですかー」

という落胆より、今、この瞬間、自分だけに注目してくれていることの方が嬉しかった。再び声が聞けたという安堵と、断られた現実が襲いかかった。向こう見ずな武勇は、さらに掻き立てられた。この間の想いと、断ち切らねばならぬ慚愧（ざんき）の念が溢れ出てきた。ペンがひとりで走る。

南西から見る姫路城の前を、優雅に舞う一羽の白鷺に翻弄される幽玄な夢想。それが電話からの声によつて遮断された。「ああ！ 人間だ！」と覚醒する。これから先へのおののき、呻きを出し尽くす。一気呵成、便箋六（しち）枚にもなった。封筒の宛名を書くとき、手が震えながらも「朋」の字を間違えないように注意を払った。

この手紙が、彼女の家へ波紋を投げかける。朋子さん

は、困惑した。まさか、図書館で前に座っていた喬という男の子が、これほどまでに想ってくれているとは……。そして、いつの間にか、自分が永遠の恋人ジンイーダに祭り上げられていることに、嬉しくもあり、戸惑いもあり、はた迷惑な気持ちだった。あらためて喬を思い起こそうとするが、力強い文章とは対称的に、瘦せた弱々しいイメージしか浮かばない。ほとんど声も聞いていないし、話もしたことがないから。

母親も電話だけなら、無視しただろう。だが、手紙まで来るとは意外だった。想いの籠もった文は、とても中学生とは思えない。作家が使うような語彙が、まだこなれていない文章の所々に散見される。自分の気持ちの移ろいを荒くはあるが細かく表している。通読してこの子、相当悩んでいるわ。

ほおつておけないという気持ちが芽生えた。

※

中田家には、子どもが三人いた。高二、中一の息子。そして中三の朋子さん。なにごとくも一家で話し合う雰囲気があった。結婚した頃からの夫の意向である。

母親は、いつものように話しかけた。

「朋子に、この手紙がきたんだけど、みんなどう思う？」

兄は、一読して

「こんな手紙を書く子が、中学にいたんか」驚いた様子だった。

「常識はずれているよ」弟。

「家へ来てもらいなさい」父親。

「どうする？」母親は娘に聞く。

「なにも話すことないわ」

「でも、この人、ずいぶん悩んでいるわ」

「姉さん、関係ないよ。勝手にこの人が想っているだけ」軽く受け止めている。

「男と女って、そこから始まるんだよ」戦時中に結婚した父親の

言葉には、重みがある。

「この子が諦めるようには、してあげたいな」兄は優しさがある。

その意を汲むように母親は、

「一度だけ、会ってあげたら？」促した。

幾分か、その気になって

「んー、でも、一対一で会うのは、いや」

「だったら、誰か知っている人いない？ 小学校が一緒だったとか」

「えーと、そうだね、大谷さんがいるわ」

「一緒に来てもらったら」

「それが、いいよ」兄。

父親も肯いて

「そしたら、夢から醒めるよ」

弟が、「姉さん、この人好きなん？」ふさげるようにいう。
ムツとしたように、

「好きもなにも、一回会っただけで、話したことないわ」と返す。

「ふーん、一回だけで、こんなに書けるんや」あらためて手紙をめくった。

「これだけ書けるんが、すごいといえすぎいいね。お父さん？」兄。

「そうだね。よく読んでいるね」

父親は、大学のフランス文学の先生。しかもフランスの啓蒙家デイドロが専門。デイドロの恋文も訳している。

成績も奮わず運動もできない喬は、中・高校で居場所がなかった。自信をもっていた文章表現も認める人はいなかった。教師たちは、教科書から離れた世界を描く文に価値を置かなかった。文学の研究者である朋子さんの父親が、唯一の認め人だったかもしれない。

まだ、不安を隠せない。へお父さんは会ってあげなさい、
といっている。だけど……

娘の心を見とおしたようにいった。

「朋子、書かれた言葉は、大事だよ」

へシャンソンが好きな父らしいへ

「でも、わたし、話すことも、顔を見ることもできないわ」

「それはそれでいいよ。この子は、お前を見てなにか学ぶよ」

父の表情に、期待をみる。

※

白羽の矢が立った大谷に電話をして、経緯を話した。大谷はビックリした。へあいつ、この人がどういう人か分ってんのか？ 大学の先生のお嬢さんやどー

だが、ひ弱そうな、あまり勉強もできない、本好きな喬に秘められたものは感じていた。へあいつなら、するかも知れないへ

手紙を出して数日後、大谷がやって来る。黙って、

「ついてこいや」とだけ、いった。彼の自転車の後を追った。ある一軒の大きな門構えの家に着く。ようやく事態がのみ込めた。

白い割烹着を着た人が出てくる。母親だろう。

「あなたが、大谷さん」

そして、こちらへ視線を移す。覚悟を決めた。

「山中喬です」

「山中喬さん」包み込むような微笑み……。

この間のわだかまりが全身から抜けていくような気がした。

奥の部屋へ入ると、制服を着た朋子さんがいる。大谷を見て、緊張から解き放たれたように笑顔がはじけた。

朋子さんは、彼だけと小学校時代のことを、ときどき笑いながら話していた。

その姿を見、声を聞くだけで満足だった。おそろく心に決めていたのだろう。顔も見ないし、話もしないことを。

二人の会話で、一つ思い出した。「りようしん」という言葉についてである。朋子さんは、「ペアレント（両親）ではなく、コンシエンス（良心）なの」と明瞭に話す。

その発音が真似のできないくらい英語らしい。学力の高さを伺わせた。彼女は身体ごと大谷の方を向いて、熱心に語っている。喬の存在を忘れるかのように。その白と紺色の制服に包まれた肢体の側面の動

きを、眼で追っていた。

一度だけ、「そういえば、喬もよく本を読んでいるな」水を向けてくれた。

一瞬、喬を見た。できる限り感情を表さない表情。その瞳に見てはならないものを見てしまった空虚さを秘めながら。うなづくのが精一杯だった。二人の親しげな会話に入る余地はない。

夢に描いていた再会こんばいは、終わった。すでに二カ月の間、疲労で困憊こんぱいしていた。実像を前にし、ランクの違いを痛いほど感じる。こんな重い逢瀬が続くはずがない。自分で納得できた。ある程度スッキリして、中田家を出る。謎の微笑みで迎え入れてくれた母親が、わずかではあるが大きな救いだった。別れの挨拶を交わすとき、寄り添いながら、大役をはたした女優のような朋子さんの顔が霞かすんだ。

※本作品は『姫路文学』88号』に掲載したものを削除・修正している。

紡ぐ 1

吉田ふみゑ

夫の綿作りは、遡ること三五年前、一般財団法人日本綿業振興会の「綿の種をあげます」という新聞記事に目を留めたことから始まった。畑仕事をしない私がその綿の種を手に入れ、「綿を作って」と言っただけに渡した。すると、思いもよらない、夫は幼い頃、家の畑で栽培している綿をお祖母さんと一緒に摘んだ、と話し出した。お祖母さんは糸車で綿も紡いでいたという。

直ぐさま種を蒔いたが、会社勤めの傍らで、休日の野菜作りと並行では僅かな綿しかとれなかった。そんな綿作りを二〇年近く続けながら種を繋いでいたが、六一歳で退職してからは、本気で綿作りに取り組みだした。

綿に触れることで、綿そのものへの興味、日本への伝来、姫路藩の綿業における経済、そして天保四年の加古川筋一揆等に興味を示し、その関連の著書や史料も古書店で見つけて購入していた。

そんな夫の綿への興味は、何度かテレビで目にしていた、ガンディーの姿にも向けられた。NHK「映像の世紀」で、それまで何気なく見ていたガンディーの装いが周囲の人となぜ違っているのか綿に触れてはじめて理解できたのだった。イギリスから木綿産業を取りもどさんと、伝統的な手法によるインドの綿製品を着用することを呼びかけていたのだ。ガンディーが、イギリスへの交渉に向かう船上で糸を紡ぐ姿は印象深いものだった。ガンディーが生まれた一八六九年にはインドで生まれた糸車はどこにもなく、紡げる人もいなかったが、ガンディーは糸車を探し、紡ぎ方を学んだ。しかし、その行為はパフォーマンスでしかなく、産業革命には勝てなかった。夫は、そんなガンディーにひどく感動し共感したのだった。

綿の原産地はインドともアフリカとも言われているが、夫はアフリカだとおもっていたので、数年前、西神吉小学校で綿の学習に招かれたとき、アフリカのカメルーンから研修に来られていた先生に、「コ

ツトンの原産地はインドですか、アフリカですか」と尋ねた。黒褐色で丸顔の先生は顔いっぱいの笑顔で「アフリカです」と明瞭に答えられたので、夫は満足そうだった。

日本への綿の伝来は、八世紀末に三河国に漂着した崑崙人から伝わったが栽培に失敗したとある。その後は、戦国時代（一五・一六世紀）、中国、朝鮮から伝わった綿が、温暖な土地での栽培に成功したと言われているが、在来種か伝来種かよくわかっていないようだ。

鎧の下に着る衣料、火縄銃の火縄といった軍需品として重宝されて需要が伸びたのだ。大河ドラマ「直虎」で三河木綿が登場した際、綿繰り器で種取りをし、弓で綿打ちをする様子が映し出された。今使っている綿道具は五〇〇年も前から形が変わっていないのだろうか？テレビの画面に目を凝らしながら私と夫はNHKの時代考証を信じてみたい気持ちになった。

最初に手に入れた日本綿業振興会の綿の種は西洋コットンだった。種が大きくて繊維が長い。これは

明治になって外国から入ってきた綿である。日本の綿は和綿（日本綿）と呼んで、小さくて繊維が短い。当然、生産性が悪い。この和綿は、古いといっても僅か三百年ほどの歴史で、明治になって西洋コットンに押されて衰退しているが、その当時の綿の五大産地、泉州・河内・摂津・播磨・備後はいずれも繊維産業が発達した地域である。播磨では加古川の靴下産業、倒産したが、稲岡工業株式会社のタオル等がある。

古い納屋の二階に放置された道具を使って糸を作りたいと思い続けて二〇年が過ぎた頃、種を取り除いた洋綿二キロ（夏のかけ布団一枚）をやつと布団屋さんに「綿打ち」に出すことが出来た。その時、夫婦で味わった達成感を忘れることができない。その後も次々と製綿して、一枚のマフラー（一八五cm・一五〇g）が織上がった。因みに、一反は一〇〇〇g、帯は七〇〇g。

夫は、やがて糸も紡ぐようになった。糸車を回して糸を紡ぎ出すという術は容易いことでは習得できない。右手と左手のバランスが本当に難しいのである。

る。毎日毎日練習する夫を見ていたらとても私には出来ない、そんな時間なんてないと思った。織機にかける縦糸ができるようになるまで、夫はしっかりと体験を積み重ねていった。私はその様子を見るだけだったが、不思議なことに、練習をしないのに、十年も見ていと紡げるようになったのだった。

夫が八月十五日、突然に逝ってしまった。遺された三ヶ所の綿の畑では、綿の木が花を咲かせ、実をつけようとしていた。綿は例年通り立派に育ち十一月三日には「第十三回 播磨の綿まつり」を開催することができた。その後も綿摘みは年明けまで続いた。仲間の協力も得られるので、三ヶ所の綿の畑の片付けをして、春には綿の種を蒔き、秋には十四回目の綿まつりを開くことにした。夫がしていたようには出来ないが、できるだけのことをしたいと思う。綿にかけた夫の熱意は洋綿・和綿・茶綿・緑綿を合せて四百本。人に任せられない気質なので一人で行っていた。引き継いだ私は、夫がひとり占めしていた苦労と喜びを知ることになった。

